

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：22501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792504

研究課題名(和文)食物アレルギーをもつ小児の食物除去の解除過程における小児と家族の体験

研究課題名(英文) Experiences in the release process of food elimination of children and families with food allergies

研究代表者

齊藤 千晶 (SAITO, Chiaki)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教

研究者番号：70347376

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：食物アレルギーをもつ小児の食物除去の解除過程に焦点を当て、小児と家族の体験と必要な支援を明らかにするために2つの調査を行った。

食物除去を解除した学童と母親への面接調査では、食物除去の解除に対しては親子ともに期待と不安が述べられ、実際の解除過程では、症状が誘発されない工夫をしていた。除去解除後は、食事管理が楽になり社会生活が変化していた。また、食物アレルギーの小児に関わる看護師への面接調査では、看護師は「安全に食べられるための支援」「小児が嫌がらずに食べられる支援」「家族が安心して子どもに食べさせられるための支援」を行っていた。これらは他職種と連携して行っており、チーム医療の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify experiences and needs of children and families with food allergy, especially release process of elimination diet.

First, we carried out interview to six pairs of school age children and mothers who experienced release from elimination diet. They said expectation and anxiety for release from food elimination, and in the actual process, mothers devised not to induce allergic symptoms by eating food that had been removed. After release from elimination diet, they came to be easy for dietary management and social life. Second, we surveyed interview with nine nurses who take care children and family with food allergy. Nurses attended children and family with "support for eating safely", "support for children eating smoothly", "support for family taking their children eating in peace mind". These supports are collaborated with multidisciplinary team.

研究分野：小児看護学

キーワード：食物アレルギー 除去解除 小児 家族 看護 セルフケア

1. 研究開始当初の背景

食物アレルギーの治療はアレルゲンとなる食物の除去が中心となり、子どもの成長に伴い集団生活が開始されると周囲の理解と協力も欠かせない。そのため、食物除去を行っている小児と家族、特に母親のストレスや負担感は大きいといわれている。

一方で、乳児期発症の食物アレルギーは年齢とともに耐性を獲得することが多く、適切なタイミングで経口負荷試験を行って食物除去の解除をすすめることも子どもの安全な生活のために大切である。しかしながら、食物除去の解除後に誘発症状を認めたために指示通りに解除がすすまないケース(足立、2010)や、解除後も4~6歳は嫌がって食べない傾向がある(宮城、2009)などの報告がある。禁止されていた食品を急に食べるように言われてもその気にならないという学童の声も数多く聞き、食物アレルギーの除去を解除する過程は、小児自身・家族ともに、除去食の継続と同様に負担を抱えていると思われる。しかし、食物除去の解除過程における小児と家族の体験に焦点を当てた実態調査はほとんど行われていない。

2010年より特異的経口耐性誘導(経口免疫療法)が研究的に開始された。この治療は、自然寛解に至らなかった幼児後期から学童期以降の小児の中でも、特にアナフィラキシーなどの即時型反応を起こす重症の食物アレルギー患者を対象に行われている。これにより耐性が獲得できるという画期的な治療法(栗原、2008、海老沢、2011)といわれている。アレルゲンの食物の摂取量の増加に伴い症状の誘発を認め、内服・注射等で対処しながら治療を進めるため、身体的苦痛を伴う治療となる。入院による治療の後には家庭でも摂取を継続する必要があり、誘発症状に対処しながらスケジュールに沿って指示量を食べ続けることになる。経口免疫療法を行う小児とその家族は、症状出現に対する恐怖、除去していたものを食べ続ける工夫や負担など、従来の食物アレルギーをもつ小児と家族が体験した負担感とは異なるものを体験していると推察されるが、当事者によるインターネット上の情報交換を見かけるのみで、学術的な調査は行われていない。この治療が今後臨床で本格的に導入された場合、当事者と医療機関だけではなく、保育園・学校とも連携を図る必要性が高まると考えられ、まずは彼らの体験を明らかにする必要があると考えた。

また、食物アレルギーをもつ小児は、集団生活における食に関する場面に配慮を必要とする。これについては、医学・看護学だけではなく、栄養学や保育・学校保健の視点からも調査されており、当事者・医療機関・学

校・地域の連携の必要性は示唆されているが、具体的な取り組みの報告は少ない。そこで、食物アレルギーをもつ小児と家族に関わる専門職者がどのような支援を行っているのか、支援をする際の工夫や問題点などを明らかにし、サポートネットワークの構築に向けた示唆を得ることが必要であると考えた。

<文献>

- 足立陽子他：食物アレルギー児における負荷試験後の除去食解除の現状,日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌,8(2),72,2010
宮城由美子他：食物負荷試験により食物除去が解除になった子どもと家族の特徴,日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌,7(2),163,2009.
海老沢元宏他：食物アレルギーに対する経口免疫(減感作)療法,喘息,24(1),71-75,2011
栗原和幸：食べれば、食物アレルギーは治る-True or wrong? 日本小児アレルギー学会誌,22(5),737-744,2008

2. 研究の目的

- (1) 食物アレルギーをもつ小児と家族の食物除去の解除過程における体験と周囲に期待するサポートを明らかにする。(研究1)
- (2) 食物アレルギーをもつ小児と家族に関わる医療従事者の支援の実態を明らかにする。(研究2)

3. 研究の方法

- (1) 研究1
小児科外来に通院する、食物アレルギーによる食物除去を解除した経験がある学童と母親6組を対象に半構成面接を行った。対象者は、食物除去を解除して半年以上が経過し、アレルギー以外の慢性疾患がない、急速経口免疫療法の経験がないものとした。調査内容は、食物除去の解除過程の生活の実際とその時の気持ち、除去解除後の生活の変化、周囲の人々や専門職に期待する支援などとした。面接内容を逐語録におこし、内容分析を行いカテゴリー化を行った。

- (2) 研究2
アレルギー専門医のいる医療機関の看護師9名を対象に、半構成的面接を行った。調査内容は、食物アレルギーをもつ小児と家族に対する支援の実際、困難や課題と感ずること、他職種との連携などとした。面接内容を逐語録におこし、内容分析を行い、一部はカテゴリー化を行った。

4. 研究成果

- (1) 研究1
小児の年齢は9~14歳、除去を解除した食

物は卵、牛乳等であり、解除後 1~5 年が経過していた。全例が現在も除去中の食物があった。

食物除去の解除に対する思いは、小児で「食べたことないものへの興味」、母親からは「解除に対する期待」が語られた一方で、親子共に「症状誘発を恐れる気持ち」も述べられた。

解除をすすめる際の母親の工夫としては、【量・時間帯を考える】【子どもが摂取しやすいように形態や味を工夫する】【解除した食物が入っているのをわからないようにする】【誘発症状に対応する】の категория が抽出された。

除去解除後の生活については、母親の語りからは【料理の手間が楽になった】【献立の幅が広がった】【外食やお菓子の購入が可能になった】の категория が抽出された。小児では、「献立の幅が広がった」「友達と同じ給食が食べられる」「アレルゲンを気にせず外食・買い物ができる」等の変化を肯定的に述べたが、「卵そのものを食べると言われる」と解除食物の摂取への負担感も述べられた。

食物アレルギーをもつ小児と家族にとって、食物除去の解除はうれしいことである一方で、誘発症状に注意しながら摂取量を増やしていくため、慎重にならざるを得ない側面もある。また、食べてはいけないと言っていた食物を子どもが摂取できるようにするには、さまざまな工夫を必要としていた。安全に負担なく除去解除がすすめられるように、具体的な栄養指導を個別にすすめることが大切である。

除去食物の解除は、新たな食生活のスタートでもあるため、子ども、家族、医療者で目標を共有し、解除過程で起こる問題をともに考え、子どもと家族の頑張りを承認していくことが、看護援助として必要であると考えられた。

(2) 研究 2

対象者の小児看護経験年数は 2 年から 27 年(平均 13.9±8.9 年)、小児看護経験年数は 2 年から 24 年(平均 10.3±7.6 年)であった。

看護師の所属は診療所・病院の外来・病棟と異なっていたが、経口食物負荷試験、解除した食物の摂取、および経口免疫療法に関する支援の実践が明らかとなった。看護師は、「検査に伴うアレルギー症状の観察・対処」をしながら「検査時の注意点を家族に伝える」ことも行い、検査時や外来受診時に「症状への対処法を説明する」など、【安全に食べられるための支援】を行っていた。また、「食べるタイミングを配慮する」「食べやすいように味や形態を変える」「食べやすくする工夫を家族に伝える」等の関わりを通して、

【小児が嫌がらずに食べられる支援】も行っていた。さらに子どもを見守る親に対して、「除去していた食物を食べることに対する不安の軽減」や「先の見通しを伝える」ことに加え、「親子の目標のすり合わせ」を行い、【家族が安心して子どもに食べさせられるための支援】を実施していた。これらは医師・栄養士等と共に行われており、多職種連携の重要性も示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

- (1) 齊藤千晶, 石井由美, 石川紀子, 西野郁子: 食物アレルギーをもつ学童の食物除去の解除過程における体験, 第 31 回日本小児難治喘息アレルギー疾患学会, 平成 26 年 6 月, 名古屋市.
- (2) 齊藤千晶, 石井由美, 西野郁子, 石川紀子: 食物アレルギーの学童をもつ母親の食物除去の解除過程における体験, 日本小児看護学会第 24 回学術集会, 東京都.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齊藤 千晶 (CHIAKI SAITO)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・看護
学科・助教
研究者番号：70347376